

令和5年度全国高校総体 「審判員報告書」

種目（ 新体操女子 ）

審判長 伊豆島知佳

副審判長 佐藤なつみ

1. 採点上打ち合わせた事項

オンラインでの事前研修はなく、現地での審判研修を実施。
ルールの確認、及び映像を使つての採点練習にて、今大会の採点基準の確認を行った。

【個人 ボールDB】

- ・身体難度と手具操作のタイミングが合っているか、手具操作が重複していないか
- ・フェッテローテーション（ドゥバン、パッセ）の最初と最後の回転
- ・手の周りの回しの操作が見えるか、タイミングが合っているか
- ・パンシェローテーション、サクラのかかとの位置
- ・Wのカウント（甲座りのカウント含む）
- ・Rの高さ、イリュージョン・リープのシリーズのカウント

【個人 ボールDA】

転がしのカウントについて、多少のバウンドがあってもワープしているように見えない（通過がきちんと確認できる）転がしはカウントする
突きのDAが受動的か能動的かの判断、高さの見極めを正しく行う等
見解が割れそうな部分の確認を行いました。

【個人 クラブDB】

- ・身体難度は、誤差の確認と手具操作の一致があるかの見極めを統一した。
- ・コンバイン難度、特にバランス+バランスは、フォームと静止、手具操作が伴っているか確認し、評価の統一をはかった。また、コンバイン難度の接続が正しく実施されていれば1難度、正しくなければ2難度となるため、最大身体難度個数に誤りがないよう打ち合わせをした。
- ・ローテーションは、フェッテ系の回転において、その都度360°や720°など正しく回転していたか、フォームが正しかったかを確認した。
- ・Wは「全身」の波動と評価できないものや個数としても見受けられないこともあるため、その都度、対話した。

【個人 クラブDA】

事前の打ち合わせではベースとなる風車の形や2本のクラブの小さな投げ受けの360°の回転が正確に実施されているかどうかをしっかりと見極めること。
そして基準となる垂直軸回転の回転不足がないか、DBやWなどとのタイミングが正しく実施されているかをしっかりと判断するということを確認してから採点に臨みました。

【個人 芸術】

- ・ダンスステップコンビネーション
明確にリズム、テンポ、アクセントがあるかしっかりと見極める。
- ・ダイナミックな変化 テンポの変化、テンポと強度の変化があるかを確認する
- ・統一性 演技の最後に全体で1度のみ減点する。重大な技術の中断
- ・つなぎ
 - ・論理的かつ滑らかにおこなっている
 - ・特徴を生かした動きか
 - ・関連性が見えるか 見極めてその都度減点していく。
- ・リズム
 - ・音楽のテンポ、速度を強調しているか
 - ・手具の動きがアクセントを表現しているか
 - ・動きと音楽のアクセント、フレーズが関連しているかその都度減点していくなど確認した。

【個人 実施】

自宅学習用採点練習と前日・当日の映像研修に基づき、マークアップの確認、ルールの確認を行った。具体的には映像研修を行い、落下、移動、DB、DA、徒手の減点箇所を確認した。特にDBの減点（0.1 0.3 0.5）の見極め、移動の減点（0.1 0.3 0.5）の見極めに重点を置いた。
また、徒手については重心の高さ、かかとの高さ、膝・つま先の美しさ等、選手の質の見極めについて確認し、見解を統一した。

【団体 DB】

フェッテローテーション時の最初の回転の見極めを正確に行う
交換の高さの判断、身体難度の誤差の見極めについて確認を行いました。

【団体 芸術】

- ・新体操の芸術は音楽と構成が一致していることが重要になる。音楽に合った演技（作品）の見極めについて打ち合わせをした。
- ・音楽が基盤となり演技が構成されることになるが、単にリズムに合った表現だけでなく、作品になっているかを評価するように確認をした。
- ・団体は5名が、演技全体を通して同じ作品を演技のはじまりから終わりまで目指しているか
の見極めの重要性を確認した。

【団体 実施】

基礎技術の減点項目について確認し、映像研修を中心に打ち合わせを行った。

2. 採点上起こった事項とその処理

【個人 ボールDB】

- ・後屈を伴う難度において、誤差が大きく入ったためにノーカウントとした
- ・難度中の転がしの手具操作で、二部位転がっていないものはノーカウントとした
- ・バランスの難度の静止が甘く、手具操作のタイミングが悪くなりノーカウントとした
- ・Wを実施しようとしても、体全体の連動がなく、また、甲座りを実施していても前屈がなく
カウントできず、減点を入れた選手がほとんどであった
- ・吊り下げの手具操作にて、完全にボールを掴んでしまっていた場合ノーカウントとした

【個人 ボールDA】

DA中の360度回転不足の判断（特に転がし）、突きのDAをDB中に行う時の実施度の見極め（
能動的だったのか）床上での脚下DAの実施度（脚の下に見えない実施等、判断に迷う実施があ
った場合はその都度確認し見解を統一しました。）

転がしの際にスタート位置や終了位置が不明確でノーカウントになる例が多かった。床上での
背面転がしは週末で床にボールが落ちる選手もいてノーカウントとなることもあった。

投げ受けのDAの高さについて高い位置からの採点で判断に迷うことがあったが、最終的な見解
としては統一されていたように思う。

基礎技術要素については正しく行う選手が多く減点はほぼ無かった。特に片手受けについては
比較的わかりやすい実施が多かった。

【個人 クラブDB】

- ・ドゥパンのフェッテターンのクオリティによっては、最初の回転からカウントできず、ノー
カウントになることがあった。また、最後の回転は360°正しいフォームで実施している選手が
少なかった。フェッテターンを多く実施する選手も多かったが、どの時点までカウントできた
かに注意し、得点出しをした。

・コンバイン難度は、挑戦する選手が増えたことは喜ばしいことだが、どちらかの難度要素が
疎かになることがほとんどだった。多くの選手がどちらかの身体難度のみのカウントになった

・Rの回転の実施度によっては、1つ目と2つ目のRが同じ種類の回転に見えた。この場合、2
回目のRはノーカウントとした。

・Rは手具が空中にある間に360°を2回連続して実施しなければならないが、360°に満たないと
判断した時、ノーカウントとした。

・Rのシリーズは、受けながら身体難度が実施できているか確認し、評価の統一をはかった。
そのため、明らかに身体難度後に受けが行われたと判断された場合、ノーカウントとした。

・手具操作において吊り下げの解釈が正しくないものがあった。特に手首の場合、手の甲にて
吊り下げる必要がある。また、正しく吊り下げられていたとしても肘で支えるような吊り下げ
も見られ、ノーカウントとしたことがあった。

【個人 クラブDA】

どの選手も作品の中にDAを数多く入れている印象であった。次から次へと入れていること
により、特に座で行なう2本の小さな投げ受けの360°の回転が不十分なものや半回転で終えてし
まうものもあり、カウントできない選手もいた。

ベースとなる風車で手が離れすぎて形が見えないものや風車が途切れてしまうものもありノーカウントとなるケースがあった。

DBやWを基準とするDAにおいては、DBやWそのものがカウントできないであろうものやタイミングが合っていないものはノーカウントとなった。

また垂直軸回転の回転不足の判断などで悩む部分についてはペアの審判と確認しあいながら採点を行なった。

フェットローテーション中にクラブの低い投げを行なうDAでは、終了時に投げる選手が多く、タイミングが合っていないものはノーカウントとなった。

基礎手具要素となる非対称が、ミスにより実施できなかったものなのか、構成上のミスなのかは不明だが確認できない選手もいて減点が入った。

【個人 芸術】

特徴の部分でしっかり組み込んで表現している選手と何もせず技だけの選手では差がはっきりついた。

フロア減点が入る選手が何名かいた。

投げ受けの多様性において減点の入る選手が数名いた。

昨年よりも、エフェクト、ダイナミックチェンジがはっきり見える選手が増えてきたように感じた。

DAをするためにステップコンビネーションがはっきりとみられないことがあった。

【実施】

バランスの「最低1秒間の形の保持がない」-0.3の実施減点が多かった。特にコンバイン難度のバランスの不正確さが目立った。

手具の基礎技術の減点も多く、ボールではつかむ、転がしが跳ねる、2部位の転がしが短い、クラブでは不正確な風車の減点等、DAのための演技構成が実施上減点に繋がってしまうケースが多かった。

技術的にはDBがDAとセットになると実施の不十分さが起こり、手具操作が正確にできる選手とそうでない選手に差が見られた。また手具操作の肘の曲がり、プレアクロバット要素の回転中の歪みや姿勢欠点もあり、1分30秒を正しく美しく踊り続けることの難しさを感じた。

ジャンプについても多くの選手に開脚度が不十分なため減点があった。投げ受けの移動については選手の競技中の様子から、ルールを理解して演技をしているかどうか大切に感じた。

【団体 DB】

ドゥバンフェットローテーションを行うチームが多く、最初の方はカウントについて見解が割れることがあったが最終的な見解としては統一していたように思う。しかし、見解が甘かったのではないかと反省点もあるので研鑽を積んで行きたい。

交換は比較的判断しやすかったように思うが、身体難度についてカウントの判断に迷うことが多かったのが反省点となった。

【団体 DA】

- ・基礎手具要素の不足（ミスの有無に関わらず）が見られたチームには減点を入れた
- ・一人の選手が土台を作っている際に、正しい場所（中央）を通過していない場合、通過の基準をノーカウントとした
- ・3本の複数投げの際、真ん中の手具の距離・高さが曖昧な演技もあり、判断が難しかった
- ・CCのタイミングが悪く、2回に見える演技もあったため、ノーカウントとした
- ・連携と連携が重なっているように見えた際は、2つ目の連携をノーカウントとした
- ・複数投げ受けと連携の組み合わせにてミスをした場合のカウントの判断が難しかった（複数投げ受けだけ、連携だけカウント、もしくはすべてノーカウント）

【団体 芸術】

・芸術において「選曲」は重要になる。選曲は5名の選手に合ったものであり、身体難度、連係、R、W、芸術的要素などが「この音で実施する」意図を表出させていなければならない。また、最初から最後までその音楽の物語を表出しなければならないが、構成上、難度の羅列に見えるチームもあった。

・今回はミスが多く、ミスがなければ芸術を評価できそうなチームもあったが、採点は憶測でつけることができない。そのため、芸術的な評価ができそうなチームも大きなミスやミスが続いた場合、評価を低くせざるを得ないことがあった。

・審判研修において芸術は、演技時間を通して、さまざまな「花」がさまざまな「様式」で咲き誇る必要があることを確認した。そのため、ミスなく実施された演技だったとしても作品に目玉となる効果やフロアの工夫などが見られなかった場合、減点が生じた。

・団体の芸術では、4秒間手具に触れていない選手や誰も触れていない手具が確認できた時、減点が生じる。この減点が、いくらか見られた。今一度、2分30秒をとって手具が丁寧に操作した演技になることを願いたい。

【団体 実施】

団体では、大きな失敗をするチームが多く大変な試合であった。特にミスが多いと、ミスに追われてしまい、四肢の減点などが引ききれない場合があった。手具が空中にある際の、身体の減点が引き切れていなかったところがあり、反省した。移動か演技か見極めが大切であることを再確認した試合であった。

3. その他特記事項・意見・感想等

【団体DA、個人ボールDB 谷川友佳子】

今大会に審判員として参加させていただきましたことに、心より感謝申し上げます。観客の皆様の声援や歓声とともに、高校生の熱い想いを感じながら審判業務にあたりました。現行のルールも2年目となり、昨年よりも難易度の高い技に挑戦している選手・チームが多いのではないかと思います。しかし、難度を上げることに伴い、芸術性との兼ね合いが難しく、オリジナリティは昨年よりも見えづらくなってしまったのではないとも思いました。最後になりましたが、開催地である北海道の先生方、全ての役員の皆様、高体連の皆様に感謝申し上げます。暑い中準備から運営、片付けまで細やかなご配慮をいただきありがとうございました。そして、このような大会に審判員として貴重な機会を頂けたことに御礼申し上げます。ありがとうございました。

【団体DB、個人ボールDA 一文字舞】

今回初めてインターハイの採点をして、判断に迷うことが多かったように思います。シニアの演技はDB・DAもコマ数が多く瞬時に見極めをしなくてはならないところですが、時間をかけてしまうことがあったのでそこが反省点です。個人的な反省としては、様々な状況に瞬時に反応して判断していく力を身につけて行きたいです。また、DB・DA共に身体難度や回転に対しての評価が甘くなる傾向にあるので、正しい実施度や誤差についてもっと研鑽を積んでいかななくてはならないと思いました。

選手の実施については、シニアということもあり表現の多様性があるユーマアのある演技が多かったように感じました。ですが団体でどのチームも同じCCが入っているのが見受けられたので、それぞれのチームが工夫を凝らしていけるとさらに見ごたえのある作品になるのではないかと思います。

研修から含め3日間、遠路はるばる北海道にお越しくださりありがとうございました。地元開催という貴重な経験をするのができ、非常に嬉しく思います。ありがとうございました。

【個人クラブDB、団体A 浦谷郁子】

2023年インターハイは観客数に制限がなかったため、声援が飛び交う中、大会が開催されたこと、その場に参加できたこと嬉しく思っております。今年は涼しいはずの北海道が暑く、さまざまな意味で「あつい」戦いとなりました。高体連、北海道の関係者の皆様の支えがあり、審判員として大会に参加することができたこと、改めて感謝申し上げます。

【個人クラブDA 伊藤久子】

今大会に審判員として参加させていただきましたことに心より感謝申し上げます。このインターハイにかける高校生の熱い想いが、フロアに立った瞬間、選手の1人1人から感じ取ることができました。この想いに応えられるよう審判員として緊張感を持ち正しく採点するという念頭に置き臨むことができました。

今大会の開催にあたり、北海道の関係者の皆様には大変お世話になりました。北海道の皆様の温かさを感じる素晴らしい大会に審判員として貴重な機会をいただけましたこと深く御礼申し上げます。

今後も今大会の貴重な経験をいかし研鑽してまいりたいと思います。

本当にありがとうございました。

【個人芸術、団体実施 一瀬留美子】

今回審判をさせていただき、心より感謝申し上げます。多くの応援の方が北海道に集まり、声出しの応援が復活したことは本当に大きな喜びです。とても心が熱くなりました。たくさんの応援により、選手たちも力を出せたのではないでしょう

か。

大変な状況の中で大会運営して下さった開催県である北海道の先生方、関係いただいた全ての方々に心から感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

【個人団体実施 小寄さゆり】

印象に残ったのは久しぶりの開会式です。高校生の歓迎の言葉が素晴らしく、感動しました。競技の2日間は、会場の応援の声が通常に戻ったことを感じながらの採点業務でした。応援有りのインターハイの雰囲気にもまれたのか、全体的に落下が多く残念な場面もありましたが、上位層はつながりが上手に構成され、スピードや大きさ表現力もあり見ごたえのある演技でした。全体を通しての演技の印象は個人・団体ともに以前に比べ、出場選手のレベルに差が開いたように思います。インターハイの舞台に立ち演技をする選手たちの表情は真剣であり、緊張しつつもどの選手も最後まで表情豊かに自分たちの演技を踊りきりました。審判員として参加させていただき、全国の高校生たちのエネルギーを肌で感じる事ができたこと、良い経験をさせて頂きました。

終わりにりましたが、大会開催にあたりご尽力いただきましたすべての方々に心より感謝申し上げます。特に開催地北海道の役員・補助員の皆様、準備から運営においてこまやかなご配慮を頂き、ありがとうございました。また、全国高体連専門部の先生方、審判業務を支えて頂いた日本体操協会審判本部の皆様、ありがとうございました。

【副審判長 佐藤なつみ】

久々の応援ありでのインターハイということで、選手・観客をはじめ会場の熱気を感じながら、緊張感をもって審判業務にあたった。

個人については、DBの大きい誤差でノーカウントになる場合も見られた。バランス+バランスのコンバイン難度では2つ目の形で静止がないことが多く、ノーカウントになることも多かった。

団体では、場外など大きなミスが出るチームが多かった。関係の個数や手以外・視野外の基準に限られる中で、できるだけ多くの基準で加点を狙っていること、芸術の観点から多くの動きを入れていることから、演技の難易度が上がっているためではないかと感じた。また、直前の小さなミス（関係の開始が遅れる、受けが不正確になるなど）から、直前の関係が完了する前に次の関係が開始されてしまい、関係の重なりでノーカウントとなることがあった。

今大会の開催にあたり、運営をしてくださった北海道の皆様、高体連の皆様、心より感謝申し上げます。高校生の最高峰の試合であるインターハイで、選手たちの熱のこもった演技を審判させていただき、大変光栄に思っています。ルール変更2年目となり、テーマやオリジナリティのある作品がまた増えたように感じました。次の大会でも高校生のよりレベルアップした演技が見られることを楽しみにしています。

本当にありがとうございました。

【審判長 伊豆島知佳】

今大会、審判員として参加させていただけたことに、心から感謝を申し上げます。北海道単独でのインターハイ開催にあたり、本当に沢山の関係者様の御協力によって試合が無事開催され、選手たちの熱い想いを感じ取ることができた試合でした。

現ルールになってから2度目のインターハイでしたが、団体ではチャレンジする技が増えた為かミスの多い大会となりました。北海道とはいえ暑さもあり、体調を整えることも困難を極めたのではないかと感じました。

個人団体共に、上位との点差はあっても作品として作り上げてきた、という演技を垣間見ることができました。難度で点数を得るだけでなく、芸術・実施で減点されないためにはどうしたらいいのかと、選手・指導者達がルールを研究してここまで取り組んできたのだと思います。

当たり前のことが当たり前ではなくなってしまい、目の前の目標を見いだせなくなってしまった事もあったであろう世代の選手達が、関係者の皆様のご尽力のおかげでまた新たに目標を掲げ、暑くて熱い夏に向かっていけることに感謝申し上げます。

最後になりましたが、地元北海道の皆様、高体連専門部の皆様、その他関係者の方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

以上